

## 事例報告書 《例》

### 「自閉スペクトラム症の女兒への環境からの支援～認知特性の理解に基づいて～」

#### 【対象事例】

1. 実施期間:200X年12月～200X+1年6月(6か月)
2. 実施機関:公立保育園
3. 対象児:5歳 保育園年長児 自閉スペクトラム症
4. アセスメント

①知能検査:5歳4か月時。WISC-III VIQ〇〇、PIQ1〇〇、FIQ〇〇。言語性検査は、年齢相応の一般的な知識を有しており、抽象的思考、暗算の能力に優れている。聴覚の短期記憶は良好と推察された。動作性検査では、年齢に比して全体的に優れ、視覚的刺激を知覚し統合する力がある。

#### ②行動観察

一人黙々と遊び続け、同年代の子どもとの相互的な関係は築きにくい。自分独自のルールやペースが強く、負けや一般的なルールを受け入れられない。口数は少ないが、語彙は獲得しており言語理解は年齢相応と思われた。非言語的コミュニケーションは乏しい。知識や集中力はあるが切り替えは苦手で、急な変更や思い通りにならないことでパニックになることがある。

#### 5. 総合所見

能力的には非常に高いものをもっている。視覚的な認知力が特に強い。言語に関しては日常的な理解ややり取りは問題ないが、言葉を正確に使うという面で、課題がある。またあいまいな物事を表現するのが難しいため、気持ちや体調などという概念に関する話はしようとしなない。幼少期より同一性保持(こだわり)が強く、聴覚過敏などの問題も抱える。困った時は、自分を守るため、かたくなに動かなくなる、しゃべらなくなるという態度で拒否を示してきたが、「頑固な子」という解釈で、いつかできるようになると周囲の大人からは考えられていた。常に不安とストレスを強く感じる生活を強いられていたと考える。

#### 【支援者の立場と支援方法】

- ① 対象児の担任保育士として、安心できる生活の保障が最優先と考え、以下の2点の支援を考えた。
- ② 認知の状態に応じた実用的な構造化、スケジュールやワークシステム・手順書などを提案し本児と保護者に提案し実践する。
- ③ 感覚の過敏さに関しては、リソーススペースを室内に設け、そこで休息をとりながら生活する。感覚的にリラックスできるおもちゃも用意する。

#### 【経過と結果】

① 写真カードによる個別のスケジュールや視覚的手がかりを活用した。見通しがもてることで、頑なに行動を拒否することがなくなり、担任と相談できるようになった。家庭では、料理番組のレシピを見ながら母と料理をするなど、自分から構造化を用いる様子もでてきた。このような手段を使うと

生活しやすくなるという実感が本児も母ももてるようになった。今まで言えなかった「拒否」や「援助要求」も伝えられるようになった。

②リソーススペースも、担任に促されながら使っていたが徐々に自分で判断し使えるようになってきた。ずっと居続けることはせずに、5分から10分ほど出てきては、みんなの中に戻るといった使い方をしてきた。本人の休みたい感覚を尊重して、見守る方法で有効に機能している。視覚的に楽しめるおもちゃや、体をゆったり沈められるビーズクッションが、リラクゼーショングッズとして定着した。



#### 【考察および今後の課題】

①②の支援を経て、保育園では安定した状態が維持され、周囲にあわせる余裕がでてきた。本児にあった具体的な支援方法を保護者と共有できたことで、家庭でも安定が図れたことも大きかった。大人が理解してくれていることが本児にも理解され、自分の困っていることや、こうしてほしいという希望も言葉で伝えることができるようになった。現在は、本児の希望も取り入れながらさらなる工夫が展開できるようになった。

乳幼児期には、周囲の環境が安心できるものと理解されることが何より大切である。そのため、本人の認知特性に配慮した環境調整が必要となる。TEACCHプログラムの構造化の手法を用いて、スケジュールやワークシステム、視覚的手がかりを取り入れ、見通しがもてる環境を構成した。また、聴覚過敏のほか、固有受容覚への鈍感さも併せ持つと評価し、刺激を回避できる環境と、好きな感覚を楽しむツールを用意した。このようにリラクゼーションの視点を保育に導入したことで更に保育園が過ごしやすい場になった。

この支援により本人のもつ不安が軽減したことにより、担任との信頼関係が形成され、安心できる場として保育園生活が認識されることになったと考える。

この事例では、アセスメントから本児を理解し支援をすることと、その理解を担任と保護者が共有することにより、安定した適応状況を確保できた。今後は、就学に向けて本児の特性理解と支援をどうつないでいくかが課題となる。